

## De Sitter 群上の Fourier 解析と跡公式

佐賀大 理工 牟田洋一

### §0. 序

Selberg の trace formula は自然に半単純 Lie 群上のある  $K$ -type に従う可積分急減少  $C^\infty$  関数の Fourier 変換の研究に導くが, これはそれ自体としても極めて興味深い問題である.

本稿においては De Sitter 群に対してある  $K$ -type に従う  $L^p$  ( $0 < p \leq 2$ )-型急減少  $C^\infty$  関数の Fourier 変換を実行し, 保型形式論への一つの応用を試みる.

### §1. 準備

$H$  を 4 元数体,  $U = \{u \in H : |u| = 1\}$  とし

$$G = \left\{ g \in GL(2, H) : g^* J g = J \right\}$$

とおく. ここに  $J = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$ .  $G$  は De Sitter 群の universal covering group の一実現である. 今,  $G$  の 3 つの subgroups

$K, A, N$  を

$$K = \left\{ \begin{pmatrix} u & 0 \\ 0 & v \end{pmatrix} : u, v \in \mathcal{U} \right\},$$

$$A = \left\{ a_t = \begin{pmatrix} \cosh \frac{t}{2} & e \frac{t}{2} \\ e \frac{t}{2} & \cosh \frac{t}{2} \end{pmatrix} : t \in \mathbb{R} \right\},$$

$$N = \left\{ \begin{pmatrix} 1-x & x \\ -x & 1+x \end{pmatrix} : x \in i\mathbb{R} + j\mathbb{R} + k\mathbb{R} \right\}$$

によって定めると,  $G = KAN$  は  $G$  の岩沢分解を与えろ. これに伴なり  $g \in G$  の分解を

$$g = K(g) a_{t(g)} x_g \quad K(g) \in K, t(g) \in \mathbb{R}, x_g \in N$$

と書く. 極大 compact 群  $K$  は 2 つの部分群

$$K_1 = \left\{ \begin{pmatrix} u & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} : u \in \mathcal{U} \right\} \text{ と } K_2 = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & v \end{pmatrix} : v \in \mathcal{U} \right\}$$

の直積であるが,  $\mathcal{U} \cong SU(2)$  従って,  $K$  の既約 unitary 表現は非負半整数の pair  $(n, n')$  で parametrize される. これを  $\rho^{n, n'}$  とし,  $\rho^{n, n'}$  の正規化された指標を  $\chi^{n, n'}$  と書く.

$G$  の元  $g$  はまた

$$g = k_1 k_2 a_t k_2' \quad k_1 \in K_1, k_2, k_2' \in K_2, t \geq 0$$

の形に書けるが,  $g \in K$  のとき この表わし方は一意である.

## §2. 関数 $\phi_{n,0}(g, s)$

半整数  $n \geq 0$  を任意に fix しておく.  $\forall s \in \mathbb{C}$  に対し関数  $\phi_{n,0}(g, s)$  を

$$\phi_{m,0}(g, s) = \int_K \frac{\chi^{m,0}(k(g^{-1}gk))}{\chi^{m,0}(e)} e^{-sT(gk)} dk$$

により定義する。  $\phi_{m,0}(g, s)$  は class  $\chi^{m,0}$  の球関数で、  
 $g = k_1 k_2 a_t k_2'$  に対し

$$\phi_{m,0}(g, s) = \phi_{m,0}(a_t, s) \frac{\chi^{m,0}(k_1)}{\chi^{m,0}(e)}$$

であり、その explicit form は 超幾何関数を用いて

$$\phi_{m,0}(a_t, s) = (1 - th^2 \frac{t}{2})^s F(s+n, s-n-1, 2; th^2 \frac{t}{2})$$

と書かれる。我々の analysis においては、 $G$  の無限遠において  
 $\phi_{m,0}(g, s)$  の behaviour が問題になる。そのため清水氏 [7]  
 によって得られた結果が必要である。

変数変換  $y = sh^2 \frac{t}{2}$  により  $\phi_{m,0}(y, s) \equiv \phi_{m,0}(a_t, s)$  は

$$\begin{aligned} \phi_{m,0}(y, s) &= \left(\frac{1+y}{y}\right)^n y^{-s} \frac{\Gamma(3-2s)}{\Gamma(n+3-s)\Gamma(2-s-n)} F(s+n, s+n-1, 2s-2; -\frac{1}{y}) \\ &+ \left(\frac{1+y}{y}\right)^n y^{s-3} \frac{\Gamma(2s-3)}{\Gamma(s+n)\Gamma(s-n-1)} F(n+3-s, n+2-s, 4-2s; -\frac{1}{y}) \end{aligned}$$

となる。右辺第1項を  $\varphi_m(y, s)$  と書くと、 $y > 1$  のとき

$$\phi_{m,0}(y, s) = \varphi_m(y, s) + \varphi_m(y, 3-s)$$

が成立つ。  $\varphi_m(y, s)$  と Plancherel density との積を  $\Phi_m(y, s)$   
 と書くと

$$\Phi_m(y, s) = \left(\frac{1+y}{y}\right)^n y^{-s} \left(\frac{2n+1}{4\pi}\right)^2 \frac{\Gamma(3-2s)}{\Gamma(n+2-s)\Gamma(1-s-n)}$$

4

$$\times \left(s - \frac{3}{2}\right) \tan \pi \left(s + n - \frac{3}{2}\right) F\left(s + n, s + n - 1, 2s - 2; -\frac{1}{y}\right),$$

= 故は  $\operatorname{Re}(s) \geq \frac{3}{2} - n$  で meromorphic,  $\frac{3}{2}$  の singularities は

$$s = -n + 2, -n + 3, \dots, n + 1 \quad (s \neq \frac{3}{2})$$

にある simple poles だけである。

今

$$g_n(s) = 2\pi (-1)^{2n+1} (s+n-2)(s+n-3) \cdots (s-n-1),$$

$$\alpha_k^n(s) = \binom{2n}{k} (s-n-2)_{2n-k} (s+n)_k,$$

$$\Psi_n(y, s) = \sum_{k=0}^{2n} \alpha_k^n(s) \int_0^1 t^{s+n-2} (1-t)^{s+n-2} \left(1 + \frac{t}{y}\right)^{-(s+n+k)} dt$$

おき

$$\mathcal{K}_n(y, s) = \frac{(s+n-1)\left(\frac{3}{2}-s\right)}{g_n(s)} \Psi_n(y, s)$$

と置く。このとき  $\Phi_n(y, s)$  は

$$\Phi_n(y, s) = \left(\frac{2n+1}{4\pi}\right)^2 \left(\frac{1+y}{y}\right)^n y^{-s} \mathcal{K}_n(y, s)$$

と書かれる。

### §3. $\mathcal{L}_{n,0}^{(p)}(G)$ とその Fourier 変換

$p$  を  $0 < p \leq 2$  なる定数とせよ。  $\sigma, \rho$  を  $G$  上のいつもの  $K$ -両側不変関数,  $\Omega$  を  $G$  の Casimir 作用素とする。  $G$  上

の  $C^\infty$  関数で

$$f \circ \chi^{n,0} = f, \quad \int_K f(kgk^{-1}) dk = f(g)$$

および

$$M_{r,l}^{(p)}(f) \equiv \sup_{g \in G} (1 + \sigma(g))^r \Xi(g)^{-\frac{2}{p}} |\Omega^l f(g)| < +\infty \text{ for all } r, l = 0, 1, 2, \dots$$

をみたすものの全体を  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  で表わし, seminorm 系  $M_{r,l}^{(p)}$  による位相をいれる. convolution により  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  は可換な Fréchet 代数となる. また  $f$  が  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  の関数なるとき積分

$$\hat{f}(s) = \int_G f(g) \phi_{n,0}(g, s) dg$$

は集合  $\mathcal{F}^{(p)} \equiv \{s \in \mathbb{C} : |\operatorname{Re}(s) - \frac{3}{2}| \leq \frac{3}{2}(\frac{2}{p}-1)\} \cup \{g \in \frac{1}{2}\mathbb{Z} : n-g \in \mathbb{Z}\}$  において絶対一様に収束する. この  $\hat{f}$  を  $f$  の Fourier 変換と呼ぶ.

$\mathcal{F}^{(p)}$  上の連続関数  $F(s)$  で,  $\operatorname{int} \mathcal{F}^{(p)}$  において正則で

$$F(s) = F(3-s), \quad F(g) = 0 \text{ if } g > n+1, n-g \in \mathbb{Z},$$

$$\mathcal{S}_{m,l}^{(p)}(F) \equiv \sup_{s, g} \left\{ (1 + |s|^2)^m \left| \frac{d^l F}{ds^l}(s) \right|, |F(g)| \right\} < +\infty$$

for all  $m, l = 0, 1, 2, \dots$ .

を満すものの全体を  $\mathcal{S}_{n,0}^{(p)}$  と書く. ただし  $p=2$  のときは直線  $\operatorname{Re}(s) = \frac{3}{2}$  上の  $C^\infty$ -関数と考えるのである. 上の seminorm 系で  $\mathcal{S}_{n,0}^{(p)}$  は可換 Fréchet 代数となる. このとき次の定理が成り立つ.

定理 1. 変換  $f \rightarrow \hat{f}$  は位相代数  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  と  $\mathcal{Z}_{n,0}(\mathcal{F}^p)$  の間の位相同型を与える.

$g > n+1$  のとき  $\phi_{n,0}(g, g)$  が 2 乗可積分なること, および

$$\int_G \left| f(g) \frac{\partial^m}{\partial s^m} \phi_{n,0}(g, s) \right| dg$$

を計算することにより  $f \rightarrow \hat{f}$  の連続性は比較的容易に得られる. 逆を云うためには, 任意の  $F \in \mathcal{Z}_{n,0}(\mathcal{F}^p)$  に対し

$$f(g) \equiv 2 \int_{\frac{3}{2}-i\infty}^{\frac{3}{2}+i\infty} F(s) \Phi_n(g, s) ds + \left( \frac{2n+1}{4\pi} \right)^2 \sum_{\substack{1 \leq g \leq n \\ n-g \in \mathbb{Z}}} (2g-1)(n+g)(n-g+1) F(g+1) \phi_{n,0}(g, g+1)$$

が  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  に属し,  $F \rightarrow f$  が  $\mathcal{Z}_{n,0}(\mathcal{F}^p)$  から  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  への連続写像なることを示せばよい.

$F$  は  $\mathcal{Z}_{n,0}(\mathcal{F}^p)$  に属するから, 関数  $F(s) \Phi_n(g, s)$  は  $\text{int } \mathcal{F}^p$  で meromorphic, かつその singularities はすべて simple poles であり, その高さは高々

$$s = -n+2, -n+3, \dots, n+1 \quad (s \neq \frac{3}{2})$$

にある. 簡単のため  $\frac{3}{p} \notin \frac{1}{2}\mathbb{Z}$  としよう.  $F$  の急減少性と留数定理によつて, 上の積分は

$$f(g) = 2 \int_{\frac{3}{p}-i\infty}^{\frac{3}{p}+i\infty} F(s) \Phi_n(g, s) ds + \left( \frac{2n+1}{4\pi} \right)^2 \sum_{\substack{\frac{3}{p}-1 < g \leq n}} (2g-1)(n+g)(n-g+1) F(g+1) \phi_{n,0}(g, g+1)$$

に等しい. この等式の右辺第 1 項を  $f^{(0)}$ , 第 2 項を  $f^{(1)}$  と書く.

とこぞで

$$\phi_{n,0}(y, g+1) = (1+y)^{-(g+1)} \left\{ 1 + \frac{(g+n+1)(g-n)}{2!} \frac{1+y}{y} + \dots \right. \\ \left. + (-1)^{n-g-1} \frac{(g+n+1)_{n-g} (n-g)!}{(n-g+1)!} \left(\frac{1+y}{y}\right)^{n-g-1} \right\}$$

であるから,  $g+1 > \frac{3}{p}$  のとき

$$\sup_{y \geq \varepsilon_0 > 1} y^{\frac{3}{p}} (\log y)^r |\phi_{n,0}(y, g+1)| < +\infty \quad (r=0,1,2,\dots)$$

が成立す。よって,  $f^{(0)} \in \mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  から  $F \rightarrow f^{(0)}$  は連続である。

3.  $f^{(0)} \in \mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  と  $F \rightarrow f^{(0)}$  の連続性は次の命題から得られる:

命題 7.2 ( $l, g \geq 0$ , integers) 定数  $B_{lg} > 0$  と  $k \in \mathbb{N}$  を適当

に選んで, 任意の  $F \in \mathcal{Z}_{n,0}(\mathbb{F}^p)$  に対し

$$\sup_{y \geq \varepsilon_0 > 1} \left| y^{\frac{3}{p}} (\log y)^l \int_{\frac{3}{p}-i\infty}^{\frac{3}{p}+i\infty} F(s) y^{-s} \frac{\partial^g}{\partial s^g} \chi_n(y, s) ds \right| \leq B_{lg} S_{lg}^{(p)}(F)$$

が成立すようにできる。

以上より,  $f = f^{(0)} + f^{(1)} \in \mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  であり,  $F \rightarrow f$  が  $\mathcal{Z}_{n,0}(\mathbb{F}^p)$

から  $\mathcal{C}_{n,0}^{(p)}(G)$  への連続写像なることがわかった。

$\frac{3}{p} \in \frac{1}{2}\mathbb{Z}$  のときも少し手を加えればよい。

### §4. Gangolli-Warner の定理の拡張

$\Gamma$  を  $G$  の discrete subgroup と,  $\Gamma/G$  が compact なるものとし,  $U$  を  $L^2(\Gamma/G)$  における  $G$  の正則表現とせよ。このとき

$U$  は重複度有限の既約表現の可算和

$$U = \sum_{j=1}^{\infty} \oplus \pi_j$$

に分解する。我々は、右辺に現われる既約成分のうち  $\rho^{n,0}$  を含むもの全体の様相を調べたい。これは Gangolli [3] が提唱した問題の *special case* である。

定義 (1).  $G$  上の非負連続関数  $f$  は、すべての  $g \in G$  に対し

$$f(g) \leq C \int_{gV} f(h) dh$$

が成立つような定数  $C > 0$  と  $G$  の compact  $e$ -近傍  $V$  が存在すると *regular growth* と云われる。

(2).  $G$  上の連続関数  $f$  は、級数

$$\sum_{\gamma \in \Gamma} f(\gamma^{-1} \gamma x)$$

が  $G \times G$  上 compact 一様収束し、 $U(f)$  が  $L^2(\Gamma \backslash G)$  上の trace class の作用素なると *admissible* であると呼ばれる。

§3 で得た定理 1 を用いれば、Gangolli-Warner [4] と同様の方法で次の定理を証明することができる。

定理 2.  $\mathcal{G}_{n,0}^{(1)}(G)$  の元はすべて *admissible* である。

定理 3.  $f \rightarrow \text{trace } U(f)$  は  $\mathcal{G}_{n,0}^{(1)}(G)$  上の *generalized function* である。

### §5. Vector bundle $\mathcal{F}_{n,0}$ 上の熱方程式

以後  $\Gamma$  は単位元以外に elliptic element をもたないとして仮定し  
 より. このとき  $\Gamma G/K$  は compact  $C^\infty$ -manifold である.  $\rho^{n,0}$   
 の表現空間を  $V_{n,0}$  とする.  $\Gamma G$  に  $K$  の表現  $k \rightarrow \rho^{n,0}(k)$  を  
 associate して得られる  $\Gamma G/K$  上の vector bundle  $(\Gamma G) \times_K V_{n,0}$   
 を  $\mathcal{F}_{n,0}$  と書こう.  $C^\infty(\mathcal{F}_{n,0})$  上の Laplacian を

$$\Delta: C^\infty(\mathcal{F}_{n,0}) \rightarrow C^\infty(\mathcal{F}_{n,0})$$

とすれば,  $\varphi \in C^\infty(\mathcal{F}_{n,0})$  に対して

$$(A) \quad \Delta\varphi = \Omega\varphi + 2n(n+1)\varphi$$

が成立つ ( $\varphi$  を  $G$  上の  $V_{n,0}$ -値関数とみなす).  $\Gamma G/K$  は compact  
 であるから,  $\Delta$  は重複度有限の discrete spectra を有す. 相  
 異なる固有値を

$$0 \leq r_0 < r_1 < r_2 < \dots \uparrow +\infty,$$

対応する重複度を

$$n_0, n_1, n_2, \dots$$

としておく.

正則表現  $\rho$  に含まれる既約成分のうち  $\rho^{n,0}$  に dual な  $K$  の  
 表現を含むものの一つを  $\pi$  とすれば,  $\pi(\Omega)$  は scalar であ  
 るが, 松島 [5] により, この値は  $r_j - 2n(n+1)$  ( $j=0,1,2,\dots$ )  
 のいずれかに等しい. <sup>更に</sup> (このような  $\pi$  の集合を  $\Pi_j$  と書くこと  
 に可すと

$$n_j = \sum_{\pi \in \Pi_j} [U : \pi] \quad j = 0, 1, 2, \dots$$

である。

前号で述べた我々の問題を「区間  $(0, +\infty)$  上の関数

$$N(r) \equiv \sum_{r_j < r} n_j r_j$$

の  $r \rightarrow +\infty$  における *asymptotic behaviour* を求めること」と解する。即ち、 $\rho^{n,0}$  に dual な表現を含む既約成分の存在集合の様相を Casimir 作用素ではかろうというわけである。

$N(r)$  の Laplace 変換を

$$L(\alpha) \equiv \int_0^\infty e^{-\alpha r} dN(r)$$

とおく。  $L(\alpha)$  の behaviour を調べる。そのため  $\mathcal{F}_{n,0}$  上の heat equation

$$(B) \quad \frac{\partial u}{\partial \lambda} + \Delta u = 0$$

の elementary solution を構成する。そのため、(A) に鑑み、 $\mathcal{E}_{n,0}^{(1)}(G)$  の中に方程式

$$(C) \quad \frac{\partial g_\lambda}{\partial \lambda} + \Omega g_\lambda + 2n(n+1)g_\lambda = 0 \quad (\lambda > 0)$$

をみたす関数  $g_\lambda$  を求めたい。 (C) の両辺を Fourier 変換すれば

$$(C') \quad \frac{d\hat{g}_\lambda(s)}{d\lambda} + (s(3-s) + n(n+1))\hat{g}_\lambda(s) = 0.$$

今,  $\mathcal{F}^1$  上の関数  $H_\lambda(s)$  を

$$H_\lambda(s) = \begin{cases} e^{-\lambda\{s(3-s)+n(n+1)\}} & s \in \mathcal{F}^1, \\ & s \neq n+2, n+3, \dots \\ & \quad -n+1, -n, \dots \\ 0 & \text{その他} \end{cases}$$

により  $\mathcal{C}$  define する. 各  $\lambda > 0$  に対して  $H_\lambda(s) \in \mathcal{G}_{n,0}(\mathcal{F}^1)$ .

また  $H_\lambda$  は (C') を満す. 定理 1 により,  $\hat{g}_\lambda = H_\lambda$  なる  $g_\lambda \in \mathcal{C}_{n,0}^{(1)}(G)$  が唯一存在する. これは確かに (C) を満す.

命題 1.  $\{g_\lambda : \lambda > 0\}$  は  $\mathcal{C}_{n,0}^{(1)}(G)$  における Dirac sequence である. 即ち,  $\forall f \in \mathcal{C}_{n,0}^{(1)}(G)$  に対して

$$\int_G f(g) g_\lambda(g) dg \rightarrow f(e) \quad (\lambda \downarrow 0)$$

が成立つ.

さて, 定理 2 により,  $\mathcal{C}$  級数

$$\sum_{\gamma \in \Gamma} g_\lambda(\gamma^{-1}\gamma x)$$

は  $\Gamma G \times \Gamma G$  上の連続関数に収束する. そこで今  $\Gamma G \times \Gamma G$  上の  $\text{Hom}(V_{n,0}, V_{n,0})$ -値  $C^\infty$ -関数  $G_\lambda$  を

$$G_\lambda(x, y) \equiv \int_K \left( \sum_{\gamma} g_\lambda(\gamma^{-1}\gamma x k) \right) \rho^{n,0}(k^{-1}) dk$$

により定義する. このとき

命題 2.  $G_\lambda(x, y)$  は heat equation (B) の elementary

solution がある。

### § 6. Asymptotic behaviour of the spectra

各  $\lambda > 0$  に対し,  $C^\infty(\mathcal{F}_{n,0})$  上の正定値作用素  $T_\lambda$  を

$$(T_\lambda \varphi)(x) = \int_{\Gamma \backslash G} G_\lambda(x, y) \varphi(y) dy$$

により定める。  $G_\lambda$  は  $\Gamma G \times \Gamma G$  上の連続関数であるから  $T_\lambda$  は trace class の作用素で, trace を計算することにより次の定理が得られる:

定理 4 (trace formula) 次の等式が成り立つ:

$$\mathcal{L}(\lambda) = \sum_{j=0}^{\infty} n_j e^{-\lambda r_j} = \frac{1}{2n+1} \sum_{\gamma \in \Gamma} \int_{\Gamma \backslash G} g_\lambda(\gamma^{-1} \gamma \gamma) d\gamma.$$

$\lambda \downarrow 0$  における  $\mathcal{L}(\lambda)$  の behaviour を求めよう。上の公式から

$$(2n+1) \mathcal{L}(\lambda) = g_\lambda(e) \text{vol}(\Gamma \backslash G) + \sum_{\gamma \in \Gamma} \int_{\Gamma \backslash G} g_\lambda(\gamma^{-1} \gamma \gamma) d\gamma$$

であるから

$$g_\lambda(e) = \left( \frac{2n+1}{4\pi} \right)^2 \sum_{\substack{1 \leq \beta \leq n \\ n-\beta \in \mathbb{Z}}} (2\beta-1)(n+\beta)(n-\beta+1) e^{-\lambda((\beta+1)(2-\beta) + n(n+1))}$$

$$+ \left(\frac{2m+1}{4\pi}\right)^2 \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\lambda\left\{\left(\frac{3}{2}\right)^2 + s^2 + m(m+1)\right\}} \left(m + \frac{1}{2} + s^2\right) s \operatorname{th} \pi(s+in) ds.$$

したがって、 $\lambda > 0$  のとき

$$f_\lambda(e) \sim \left(\frac{2m+1}{4\pi}\right)^2 \lambda^{-2}$$

が得られる。残る項については、命題1と集合

$$\{g^{-1}\gamma g : g \in G, \gamma \in \Gamma - \{e\}\}$$

が  $K$  と交差する  $\Gamma$  の closed set を  $\Gamma_g$  として

$$\sum_{g \in \Gamma_g} \int_{\Gamma_g} f_\lambda(g^{-1}\gamma g) dg \rightarrow 0 \quad (\lambda > 0)$$

が成立すると推測できる。特に、 $f_\lambda$  自身 regular growth なることを云えば上のことは成立する。このとき

$$\mathcal{L}(\lambda) \sim \frac{2m+1}{16\pi^2} \operatorname{vol}(\Gamma/G) \lambda^{-2} \quad (\lambda > 0)$$

或いは

$$N(r) \sim \frac{2m+1}{32\pi^2} \operatorname{vol}(\Gamma/G) r^2 \quad (r \rightarrow +\infty)$$

なることがわかる。

## 参 考 文 献

- [1] M.Eguchi & A.Kowata, On the Fourier transform of rapidly decreasing functions of  $L^p$  type on a symmetric space, Hiroshima Math. J.,6(1976), 143-158.
- [2] L.Ehrenpreis & F.I.Mautner, Some properties of the Fourier transform on semisimple Lie groups I, Ann. of Math.61(1955) 409-439; II, Trans.A.M.S.84(1957), 1-55; III, Trans.A.M.S. 90 (1959), 431-484.
- [3] R.Gangolli, Asymptotic behaviour of spectra of compact quotients of certain symmetric spaces, Acta Math.121 (1968) 151-192.
- [4] R.Gangolli & G.Warner, On Selbeg's trace formula, J. Math. Soc. Japan 27 (1975), 328-343.
- [5] Y.Matsushima, A formula for the Betti numbers of compact locally symmetric Riemannian manifolds, J. Diff. Geom. 1 (1967), 99-109.
- [6] 牟田 洋一, 一般ローレンツ群上の調和解析, 教理解析研究所講究録,182 (1973), 119-140.
- [6'] Y.Muta, Fourier analysis on the De Sitter group and the trace formula, to appear.
- [7] Y.Shimizu, An analogue of the Paley-Wiener theorem for certain function spaces on the generalized Lorentz group, J. Fac. of Sci. Univ. of Tokyo 16 (1969), 13-51.
- [8] R.Takahashi, Sur les représentations unitaires des groupes de Lorentz généralisés, Bull. Soc. Math. France 91 (1963), 289-433.

- [9] P.C.Trombi & V.S.Varadarajan, Spherical transforms on semisimple Lie groups, Ann. of Math. 94 (1971), 246-303.